

仏教国家・ブータン

—ブータン仏教国際会議参加報告—

藤能成

(龍谷大学文学部教授)

目次

1. はじめに
2. ブータン訪問の概要
3. ブータンの建物・文化等
4. 訪問地
5. 「世界化された仏教に関する国際会議」の概要
6. ブータンという国
7. 会議日程表および発表題目・発表者一覧(資料)
8. 筆者の発表論文: 「現代日本人の苦悩と無明」
How Avidya Leads to Suffering: Paradigms and Transformations in Contemporary Japanese Society
9. ブータン訪問写真集

【キーワード】

ゾン ラカン チョルテン GNH 現代社会

1. はじめに

発表者のブータン訪問は、ブータン研究所（Centre for Bhutan Studies）とブータン国内務・文化省が主催する仏教国際会議に参加するためのもので、2012年5月18日から28日までの10泊11日間であった。6年前のことになるが、本年、報告書を提出し、ブータンという国の雰囲気、是非お伝えしたい。

会議は、首都ティンブーから山道をバスで8時間かかる、中央ブータンにあるブムタン地方の聖都・クルジェで開催された。ブムタン地方には多くの古刹が集中している。会議の日程は、5月21日、22日、23日の3日間であったが、会議の前後の時間には、ブータン研究所の職員の手厚い案内で、多くの寺院やゾンの訪問を行うなどブータンの仏教文化に触れる上で充実した内容の日程であった。

2. ブータン訪問の概要

①訪問者：藤 能成

② 訪問の目的：

「世界化された仏教に関する国際会議」（5月21日－23日）に参加し、研究発表を行うため。

（主催者：ブータン研究所、ブータン国内務・文化省）

③ 会議名：世界化された仏教に関する国際会議

④ 会議のテーマ：境界なき仏教

⑤ 開催地：聖都・クルジェ（ブータン国ブムタン地方）

⑥ 会議期日：2012年5月21日（月）－23日（水）

⑦ 出張日程：2012年5月18日（金）－28日（月）＜10泊11日間＞

5月18日（金）TG623 関西空港発 11:45→スワナプーム空港着 15:35（バンコク）

【日本時間－2時間】 バンコク泊

5月19日（土）KB127 スワナプーム空港発 06:50→パロ空港着 10:00（ブータン）

*バングラデッシュ・ダッカ経由 【時差：日本時間－3時間】

首都・ティンブーへバスにて移動（約1時間）

市街散策、市内寺院参拝、内務文化大臣主催の夕食会 ティンブー泊

20日（日）ブムタン（Bumthang）へ移動（264 km、バスで8時間） ブムタン泊

途中訪問地：チョルテン、ワンデュ・ポダン・ゾン、トンサ・ゾン

21日（月）ブムタン・クルジェにおける仏教国際会議① ブムタン泊

22日（火）ブムタン・クルジェにおける仏教国際会議② ブムタン泊

23日（水）ブムタン・クルジェにおける仏教国際会議③

訪問地：クルジェ・ラカン、ジャンパ・ラカン、

ジャカール・ゾン、タン・メバルチョ

ブムタン泊

ブータン研究所長主催の夕食会

24日（木）ティンブーへ移動（飛行機またはバス）

訪問地：タクツァン寺院登山口、キチュ・ラカン、パロ・ゾン ティンブー泊

25日（金）ティンブー史跡踏査

ティンブー泊

訪問地：タンゴ仏教大学

26 日（土）タクツァン僧院 登山

パロ泊

27 日（日）KB140 パロ空港発 10:50→スワナプーム空港着 16:15 , ホテルにて休憩

TG622 スワナプーム空港発 23:30（夜行便）→ 関西空港へ

28 日（月）TG622 関西空港着 07:00

3. ブータンの建物・文化等

・**ラカン**：たいいてい様々な目的の建物が集まる複合施設となっており、世話人である僧侶が住んでいる。寺はブータン建築が基本形で、これを小型化・単純化すれば民家、要塞化・大型化すればゾンに近づき、その境界はわかりにくい。

・**ゾン**：寺院と地方行政の中核としての機能をもった建物。尾根や見晴しのよい場所に建ち、古くはチベット軍の攻撃に備えた砦でもあった。ツェチュ（グル・リンポチェの祭り）が行われる石畳の広場、裁判所や県庁の事務所、回廊で囲まれた寺院等から構成される（ゾンには必ず寺院が付設されている）。

・**チョルテン**：仏塔は信仰の証として建てられる。四角い屋根付きのブータン式（色々な場所にある）、五輪塔敷き、眼が描かれたネパール式がある。マニ車が回る水車小屋型もある。

・**ケマー**：ラカン、ゾン、チョルテンに見られるように白壁に紅い帯（ケマー）が横に引かれた建物は宗教施設であることを示す。

・**民家**：基本的な民家の構造はどここの地域でも同じである。西ブータンでは、家は末娘に受け継がれる伝統がある（『地球の歩き方』）。（ブータンでは）男女の関係が非常に平等であるというか、女性が従属的でなければならないという社会通念が非常に薄い。（中略）母系社会の名残で女性が家とか田畑といった財産を相続することも多く、こうした経済的な基盤も女性の自立性・自立意識を高めているひとつの理由であろう（今枝由郎『ブータンに魅せられて』、100 頁）。

・**ダルシン**：幅 50 センチぐらいの経文が印刷された旗、長い竿に取り付けられている。五色があるが、一般的には白が多い。民家のでっぺんにも立てられている。竿を使わずに橋の欄干等に吊るす場合は**ルンタ**と言う。

・**マニ車**：内部に経文を納めた円筒で、一回まわせば、その経を読んだのと同じ功德があるという。宗教的建築の入り口の両側、そして建物の周りにはたいいていマニ車が備えられている。マニ車も、寺院の周囲を回ってお参りする時も、時計回り（右回り）である。

（以上、地球の歩き方編集室『地球の歩き方』ダイヤモンド・ビッグ社、2012 年参照）

4. 訪問地

＜首都・ティンブー＞

①チャンガンカ・ラカン（ティンブー）：15 世紀に建立された、丘の上に立つ古刹、ティンブーの守護寺であり、子どもの成長に靈験があると信じられている。

②タンゴ仏教大学：タンゴは馬の頭の意。ラマ・ギャルワ・ラナンパによって 13 世紀の創建。現在の建物は 1688 年に建立された。僧侶対象の仏教大学（修士課程までを有する）と

なっており、リンポチェがおられる。麓から1時間30分程、徒歩で登山する。

<ドチュール峠：ティンブーから古都・ブナカへの道>

○ドゥリュク・ワンゲル・カンツァン・チョルテン（2003年戦勝記念）

<ワンデュ・ポダン・ゾン>

○ワンデュ・ポダン・ゾン：1638年の創建、シャブドゥン・ンガワン・ナムゲルがこの地を最初に訪れた時に、ゾンを建立し、初めて出会った少年の名：ワンデュを名前とした。大変残念なことに2012年6月24日に火災が発生し、26日までに全焼し、世界的なニュースとなった。

<トンサ>

○トンサ・ゾン：最大級のゾン。高祖父・ンガキ・ワンチュクが建てた寺を、シャブドゥンが拡張し、歴代のペンロブが完成させて行った。現王制の成立も、トンサのペンロブとしての権勢を基盤としており、2004年に皇太子であった現・第5代国王のトンサ・ペンロブ就任もここで行われた。トンサやブムタンは、伝統と権威を支える「王家の谷」である。

<ブムタン、クルジェ：会議の開催地>

①クルジェ・ラカン：建物は3棟よりなっており、向かって右は1652年、トンサのペンロブが、中央は初代国王・ウゲン・ワンチュクが1900年に建立、左は1990年、第3代王妃が創建した、王室と関係の深い寺院。

②ジャンパ（弥勒菩薩）・ラカン：パドマ・サンバハより100年前、7世紀、ツォンツェン・ガンボ王がキチュ・ラカンと共に創建した、最古の寺のひとつ。

③ジャカール・ゾン：（白き鳥の城）：シャブドゥンが、トンサのペンロブ（行政官）に命じて1646年にこの地にゾンを建てさせた。現在の建物は1897年の地震で崩壊した後、即位前の初代国王ウゲン・ワンチュクが再建したものである。

④タン・メンバルチョ：ペマ・リンパはある日、衆目の前でバターランプを持ったまま、淵に飛び込み、水底から経典や宝物を持ってきたが、その間もランプは消えなかったという。そのため Burning Lake と呼ばれる。

<パロ：ティンブーの東、空港のある町>

①キチュ・ラカン：7世紀、ツォンツェン・ガンボ王が108か所に建立した寺院のひとつと、伝えられる。1968年に第3代国王妃ケサン・ワンチュクによって建立された新堂には、パドマ・サンバハの大像が安置される。

②パロ・ゾン：映画『リトル・ブッダ』のロケが行われた。17世紀に全国を統一したシャブドゥンが創建。世襲制のワンチュク王朝の成立以前、ドゥク派の高僧・シャブドゥンを最高権威とする政教一致体制であった。チベットから帰った僧によって15世紀に建てられた寺院を、1645年にシャブドゥンが譲り受け、工事に着手した。現在のゾンは、1907年の火

事で焼失した後に再建されたもの。

②タクツァン僧院：タクツァンは「虎の寝ぐら」という意味。8世紀、チベットからブータンに仏教を伝えたパドマ・サンバハ（グル・リンポチェ、八相の化身を持つ）が、虎の背中に乗ってクルテ地方から飛んできて、瞑想を行った地。タクツァンには13の聖地があるが、17世紀に建立されたタクツァン・ペルプは500メートルの岩壁にある。1998年に火災で焼失したが、2004年に再建された。登山口から3時間半の行程と言われるが、私は2時間半で上った。
（前掲『地球の歩き方』より）

5. 「世界化された仏教に関する国際会議」の概要

本会議はブータン研究所ならびにブータン国内務・文化省が主催する、仏教に関する初めての国際会議である。会議の目的は以下のように説明されている。

21世紀の仏教は、世界化の度合いを強めており、現在、創造的、改革的な仏教資源の応用に関する議論を深めることに国際的な関心が集まっています。それらは創造的・学術的分野を含んでおり、一般教養、人文科学、社会学、環境学、経済学、紛争解決、瞑想の方法、医学的・認知科学ばかりでなく技術革新の分野にも広がっています。本会議では、多くの仏教国や仏教文化圏を繋ぎ、これらの分野の問題について今日の世界における創造的な議論の場を提供する中で、探求し応用する道を、分かち合い、互いの協調への道を探ろうとします。国家や文化を超えて仏教徒コミュニティのネットワークが組織されれば、有効な絆としての役割を果たすことでしょう。ですから、ここでの議論は、国家と文化の境界を越えると同時に仏教者それぞれの個性を活かしながら織られるタペストリーであり、これからの時代における変化と挑戦に対し、有効な展望を示すことになるでしょう。それは今日仏教者達が仏教哲学や諸学派の思想を分析・解釈し分類することを通して世界に向き合う中でなされるものです。

開催地は初代の王都が置かれたブムタン地方クルジェである。会議は、主催者からの招請に応じた世界各国（日本、中国、香港、台湾、タイ、オーストラリア、アメリカ、カナダ、ドイツ）からの22名、ブータンから3名と1組が発表者として参加した。会議には、発表者の他にも十余名の参加者があった。会議は「境界なき仏教」をテーマとして二日間にわたり、英語により進められた（ブータンでの学校教育は英語で行われており、ほとんどの国民が英語を話せる）。

開会式は、ミンジュー・ドルジ内務・文化大臣の主催で、仏教の儀式により始められ、大臣からキーノートスピーチがあった。研究発表は4名の発表者と1名の進行役を単位とする、一日に3セッションずつ、二日間で六つのセッションが行われた。

各セッションは約2時間であり、発表時間は1人20分、討議時間はセッション30分であった。進行者によっては、各発表の後に内容を要約しコメントを加えることもあり、その後の討議は和やかな雰囲気の中で、ゆったりと進められた。セッションとセッションの合間には、外の広場のテントを中心に、お茶とお菓子が振舞われ、参加者やブータンの関係者達が、お互いの意見を自由に交換し、親睦を深めることができた。

セッション毎のテーマを開催順に示すと1「仏教の生活文化」、2-3「仏教学の研究：理念、哲学、歴史、民俗I・II」、4「経済、国家、リーダーシップと仏教的価値観」、5「仏教と福祉」、6「仏教の多文化性」であり、それぞれの発表者が専門とする立場からの提言や、社会的実践

が報告された。

私の発表順序が、開会式のすぐ後、第1セッションの1番目であることを知らされたのは、ブータンに着いてからであった。発表当日の朝4時半に起き、7時までかかって、やっと準備を終えることができた。私は「現代日本人の苦悩と無明」という題で発表した。多くの日本人が抱える孤独・孤立・不安・虚しさ・死への恐怖といった苦悩の原因は、認識方法が観念化してありのままの世界に触れていない、すなわち無明であることに起因しており、親鸞聖人がすでに観念的認識方法の問題性について指摘していたことを紹介した。

会議に先立つ19日、ティンブーにて内務・文化大臣の主催による晩餐会が開かれた。20日はバスによる移動日、21日・22日は会議、23日はブムタンの聖地巡礼のプログラムにより史跡を見学した。23日はブムタンにおいてダショー・カルマ・ウラ・ブータン研究所所長の主催による晩餐会が開かれ、その際私は、所長と同席する栄誉をいただいた。

会議のすべての模様は国営ブータン・テレビ(BBS)で放映され、ブータン研究所のホームページでも公開された。また発表論文は書籍として刊行された。仏教国であるブータンの国を挙げての行事であったと言えよう。ブータン研究所でも今回の会議が大きな成果を納めたことを高く評価しており、翌年も同じ時期に同じ形式で開催する予定であった(しかし、資金面の問題のためか、翌年は開催されなかった)。

*筆者の発表“*How Avidya leads for Sufferings-Paradigms and Transformations in contemporary Society*”の模様は、ブータンのテレビ局で放映され、ブータン研究所のホームページ、およびYou tubeにアップロードされている。発表がアップロードされているのは、24人のうち8名分である。You tubeでは、Bhutan Buddhism conferenceで検索すると出てくる。私の発表は、以下のアドレスである。

<https://www.youtube.com/watch?v=jTOZYRtVDPw>

*会議での全発表論文は、ブータン研究所からインターネット書籍として刊行されている。ブータン研究所の会議での発表論文はHome page:Centre for Bhutan studies & GNHでpublication, proceedingsと進むと、参照できる。: “Buddhism Without Borders – Proceedings of the International Conference on Global Buddhism”
<http://www.bhutanstudies.org.bt/buddhism-without-borders-proceedings-of-the-international-conference-on-global-buddhism/>

6. ブータンという国

①**位置と宗教**: 北インド・ネパールの東に位置し、面積は九州と同じくらい、人口70.8万人、首都はティンブー、民族は、チベット系、東ブータン先住民、ネパール系等、言語はゾンカ語、宗教はチベット系仏教、ヒンドゥー教等がある。(外務省ホームページより)*ただし、仏教以外の宗教についても寛容である。憲法に「ブータンは、仏教を精神遺産とする。ブータン国王は、すべての宗教の保護者である」と記されている<今枝氏談>。

②**歴史**: 17世紀、この地域に移住したチベットの僧侶ガワン・ナムゲルが、各地に割拠する群雄を征服し、ほぼ現在の国土に相当する地域で聖俗界の実権を掌握した。

19世紀末に至り東部トンサ郡の豪族ウゲン・ワンチュクが支配的郡長として台頭し、1907年、同ウゲン・ワンチュクがラマ僧や住民に推され初代の世襲藩王に就任、現王国の基礎を確立した。

1952年に即位した第3代国王は、農奴解放、教育の普及などの制度改革を行い、近代化政策を開始したが、1964年、地方豪族間の争いに起因する当時の首相暗殺や、その後に任命された首相による宮廷革命の企み発覚を契機に、首相職が廃止され、国王親政となった。

1972年に16歳で即位した第4代国王は、第3代国王が敷いた近代化、民主化路線を継承・発展させ、王政から立憲君主制への移行準備を主導。

2006年12月、第4代国王の退位により、現国王（第5代）が王位を継承。2007年12月及び2008年の総選挙を経て、2008年4月に民主的に選出されたティンレイ政権が誕生し、5月には国会が召集され、7月に憲法が施行し、王政から議会制民主主義を基本とする立憲君主制に移行した。2008年11月に、現国王の戴冠式が行われた。（①と②：外務省ホームページより）

③GNHについて

ブータン王国では、1972年に第4代国王ジグミ・シンゲ・ワンチュクが「国民総幸福量(GNH)は国民総生産(GNP)よりも重要である」として提唱した国民総幸福量 GNH を建国の理念に掲げている。GNHの実践に向けては4つの柱を基にそれを9つの指標へと展開して数値化を図り、2008年ブータン初の総選挙後に開会した議会ではジグミ・イエゼル・ティンレイ首相がGNH委員会と10の各省を率いてGNHを広く政策に反映させ、ブータン国民に普及している。

4つの柱

- 1 持続可能な社会経済開発
- 2 環境保護
- 3 伝統文化の振興
- 4 優れた統治力

9つの指標

- ①心理的幸福 ②時間の使い方とバランス ③文化の多様性
- ④地域の活力 ⑤環境の多様性 ⑥良い統治 ⑦健康 ⑧教育
- ⑨生活水準

◎第4代王の言葉「私が意図したことは、(幸福よりも)むしろ「充足」である。それは、ある目的に向かって努力する時、そしてそれが達成された時に、誰もが感じることである。この充足感を持つことが、人間にとってもっとも大切なことである。私が目標としていることは、ブータン人の一人一人がブータン人として生きることを誇りに思い、自分の人生に充足感を持つことである。(今枝由郎『ブータンに魅せられて』岩波書店、2008年、166頁)

◎ブータンの人たちが感じる幸せとは何なのだろう。昨年秋まで1年間、ブータン政府で重要政策の統括などを担う「GNH委員会」で首相フェローを務めた御手洗瑞子氏は、ブータンで生活して、人々が意識する幸せの「範囲の広さ」を感じたという。「輪廻転生を信じているブータン人は、現世で嫌なことがあっても『来世もある』と考えられる。また、家族の絆が強いため、幸せは個人ではなく家族単位。家族が幸せなら自分も幸せと感じられるのだと思いました」(朝日新聞出版 Web 新書『ブータン激動「世界でいちばん幸せな国」の未来』より)

◎「ブータン人達は、人間的なサイズの社会で、自然と調和し、仏教の教えに従い慎ましく、等身大で人間味溢れる生活を満喫しているヒューマニストたちである」。(今枝由郎『前掲書』, 187 頁)

◎英国レスター大学による、世界の 187 カ国、8 万人以上の調査結果に基づく「世界幸福地図」(2006 年)によれば、人生の充足度は、上からデンマーク、スイス、オーストリア等に次いで、ブータンは世界で 8 位、アジアで 1 位であり、日本は 90 位であった。ブータン政府による人口調査(2005 年)では「あなたは今、幸せですか」との問いに、「非常に幸せ」45%、「幸せ」52%、「あまり幸せでない」3%であった。(今枝由郎『前掲書』167 頁)しかし、ブータン研究所の 2010 年度調査によると、「幸せ」と答えた人は 41%に減っており、ブータンへの貨幣経済の浸透により、物質的な豊かさに関心を持つ人が増えたためではないかと指摘されている(『アエラ』2012 年 6 月 29 日号)。

④ブータン人の信仰と幸福観

ブータンの家庭には必ず立派な仏間があり、信仰が生活の中に根付いている(藤)。

調査によればブータン人が、祈りに費やす時間は平均で一日当たり 1 時間を超えている。これは若い学生であっても同様である。必ず祈らなければならないということはないが、一人ひとりが、自分を見つめる時間を持っている。このことが、ブータン人の精神性を支えていると見ることができる。ブータンには「幸せ」という言葉がなく、「ガー」(喜ぶ・好き)、「キー」(心地よい)等の感情がそれに相当する(第 4 代国王も、GNH ではなく、この言葉で表現しているという。今枝由郎『前掲書』162 頁)。家族の繋がり・近い人々との絆が一番重要だと考えている。

また、ブータンでは僧侶の数が多く、50 人に一人が僧侶である。国民の誰でも親戚の中に僧侶がいて、僧侶と親しく付き合いながら生活をしている(今枝由郎氏談)。

リンポチェという生まれ変わりの生き仏の存在も、国民の信仰心を高める上で、大きな役割を果たしていると思われる。仏が決して、過去のものでも想像上のものでもなく、自分の子として生まれてくるかもしれない。具体的に仏が人として生まれ変わり、ブータンの人々を守ってくださっているという実感は、信仰心を維持して行く上で、大きな力となるのではないかと(藤)。

<トンサ大学教授 ロボン・ルンテン・ギャツォ氏の談話>

僧侶の生活：一日のスケジュールは大体決まっている。お経の長さによって、時間が変わってくる。朝、夕 1 時間程の読経、瞑想の時間を持つ。

一般の人：毎日 15 分から 1 時間程度の祈りの時間を持っている。

家で祈りの時間を持たなくとも、学校で祈りの時間がある。学校で教えるのは、「他の人々を助け、皆のために働きなさい」、「皆の幸せが自身の幸せ」であること。生きる目的として「成功することや競争に勝つことの前に、良い人間であることが重要である」と教えている。(GNH: 第 4 代国王は国民に「よい人間であれ、そうすれば世界に通用する」と教えてきた)。

「自己中心性を離れること (selflessness) が大切である。自己中心的であること (selfishness) よりも、自己中心性を離れることが、より人間に力を与えるものだ」。

ブータン人達は、普通に仕事に付き、結婚し、子进行け、家族と共に暮らす生活の中に幸

せを見出している。

⑤第二次ドワール戦争[2003 年]の経緯（今枝由郎氏による）

インド・アッサム地方の独立派のゲリラが、ブータン南部に侵入 31 の拠点を築いた。インドは、ブータンが独立派ゲリラを擁護していると看做し、両国間の緊張は極度に高まっていた。第 4 代国王は、自ら武器を持たずゲリラの 31 拠点をすべて回り、退去を要請した。しかし、ゲリラが要請に応じなかったため、武力により退去させる方策が取られた。これが第二次ドワール戦争である。ゲリラの数は 3000 人余と見られ、通常ゲリラ戦の場合は、その 3 倍の兵力をもって攻撃するが、ブータンでは軍義勇兵を募った。数千名の志願者があったが、700 名しか採用しなかった。現 5 代国王の弟も義勇兵として参加した。攻撃は二日間で終わり、ゲリラを退去させることができた。ブータンの兵士 11 名とゲリラ（数は不明）が犠牲となった。戦闘が終わっても、戦勝祝典等は全く何も行われなかった。王の妃は 11 名のブータン兵士とゲリラ側の犠牲者の冥福を、一人部屋に籠って祈った。王は日ごろ兵士に「ブータン軍の目的は勝ことではなく、紛争のない状態、平和を保つことである。この責任は王にある」と語っていた。戦闘の前に中央僧院の 5 閣僚の一人が「あなた方は慈悲の心を持たねばならない。ゲリラ兵についても殺生が認められることはない」と訓示した。また、勝って帰ってきた兵士たちに王は、「戦争行為において褒められることは何もない」と語り、戦勝式典は何も行われなかった。その後、ドチューラ峠のチョルテンに戦勝記念の仏塔が 108 追加され、なくなった両国の兵士と動物達を弔うお堂が建てられ、12 月にお祭りが行われている。王は、不殺生戒を忠実に守る立場から戦闘を指揮したのである。

第 2 次大戦において、日本の仏教教団が、不殺生戒は小乗の戒であって、大乘の戒ではないと主張したのとは異なる。このことは戦後の講話条約においても、セイロン、インド、カンボジア等の仏教国が、法句経の「怨みは怨みによって鎮まることはない」との教えから、日本への賠償権を放棄したことも想起させる。

⑥ブータンの印象―心と現実の繋がり―

ブータンの国に着いた時から、時間がゆっくりと流れ、自然が優しいという感じを持った。人間と自然が調和的に共存し、放し飼いにされた牛や犬が自由に歩いている。

一般にブータン人は、落ち着いていて威厳があり、人格の重みを感じさせ、深い精神性を湛えている印象を受ける。また精神的には、個人的欲望、怒り、不満といった感情に流されず、穏やかであり、皆が仲良く信頼し合い、家族を中心とした温かい人間関係の絆の中で暮らしているように見えた。

単純に言うと「喧嘩をせず仲良く暮らしている人々」といった印象である。

人々の服装は、男性はゴ、女性はキラという民族服で統一されていて、普段着なのに晴れ着のような美しい生地を着用している人も多いように感じる。身なりも綺麗で、衛生的である。

家屋のデザインも統一されていて、美しい。家屋は、どれも大きく立派で、作りが良い。日本でいえば邸宅に当たる。家屋のデザインも伝統的な様式で統一されているので、街は綺麗である。建物の作りも丁寧で、丹精込めて仕事をした跡が伺われる。特に窓枠には、繊細で美しい彫刻が施されており、彼らの芸術性の高さを見ることができる。

このように、現実の形として作り出されたもの、社会、自然のあり方が、ブータン人の心・

精神が具現化したものではないかと思う。GNP では低位で貧しい国に位置付けられるそうだが、乞食の存在も見られず、ブータン人は余裕のある生活をしているように感じた。

⑦ブータンと鎖国、そして西欧化

ブータンは西欧化の波を抑えてきた国である。ブータンの鎖国は 1959 年に解かれた。この年、中国軍がチベットに侵入し、ダライラマ 14 世が亡命した。ブータンは、中国軍の侵入を防ぐために、チベットとの国境を封鎖し、インド軍の援助を仰ぐことになったのである。

現在は、電気、テレビ、インターネット、携帯電話、自動車などが普及している。しかしテレビ放送が始まったのは 1999 年である。

西欧化とは、科学主義に基づき、産業を発展させることによって、豊かで快適な暮らしを実現することにより、人々の幸福を実現しようとすることを指す。西欧の近代化は、グーテンベルグの印刷技術の発明により、聖書が大衆の手に届くことによって、教会の権威に疑問が起こる中、宗教改革が起こり、そこにデカルト、ニュートンを中心とする近代科学が生まれたことを基盤としている。そこには、中世の教会を中心とする権威からの自由、そして人間中心主義がある。近代科学は、物質を人間の精神から切り離すことによって、「客観的な真理」としての立場を確立した。科学が扱う対象が、純粹化・抽象化された物質であったため、科学の目を通して観察される世界は、人間の精神から分離された客観的な物質世界となった。このような物質中心の近代科学を基盤として、西欧の近代化が勧められ、20 世紀は西欧近代化の時代と言ってもよいであろう。このような近代科学を基盤とする産業社会が目指したのは、神・自然から自由になり、人間が、自己中心の欲望が満足される「人工的な生活環境の創造」である。つまり、西欧化は、自己中心の欲望を追求する、物質中心の社会をもたらした。したがって西欧化された社会においては、人間の理性を絶対視し、(物質主義に基づく) 科学を真理の基準と考え、人間の精神と生きることの目的と意味は無視され、見えない次元や働きを掴む感性等が衰退し、宗教への信仰心は低次のものとして扱われるようになる。物質主義的な価値観や認識方法により、人と人との絆は断ち切られていく。

ブータンは、現在、テレビ、インターネット、携帯電話、自動車等の普及を通して、急速な西欧近代化の波にさらされている。近代化の進展は、人々の自己中心性、欲望を刺激し、物質主義へと誘導することだろう。このような中で、ブータンの人々が、物質の誘惑に抗して、従来の伝統的な信仰生活や精神性をどれだけ維持していくことができるかが、問われていると言えるだろう。今後、ブータンの人々の生き方に注目したい。そのことは、すでに近代化された社会に身を置く私達が、「本当の幸福」や「人生の意味」を考える上での、大きな手掛かりを与えてくれるに違いない。

<参考文献>

今枝由郎『ブータンに魅せられて』岩波書店、2008 年

地球の歩き方編集室『地球の歩き方』ダイヤモンド・ビッグ社、2012 年

『アエラ』2012 年 6 月 29 日号

『ブータン激動「世界でいちばん幸せな国」の未来』朝日新聞出版 Web 新書 2012 年

外務省ホームページ : www.mofa.go.jp/mofaj/area/bhutan/

7. 会議日程表および発表者・発表題目一覧（資料）

Programme, Abstracts and Bio-datas

Programme International Conference on Globalized Buddhism 21-23 May, 2012 Bumthang, Bhutan			
Minutes	Time		Day 1: Saturday, 19 May 2012
	9:50 AM		Arrival of participants
60	9:50 AM - 10:50 AM		Travel to Thimphu
	10:50 AM		Check in
90	12:30 PM - 1:30 PM		Lunch
	1:30 PM -		Rest
60	7:20 PM - 8:30 PM		Reception Dinner hosted by HE Minister of Home & Cultural Affairs (Jambayang Resort)
Day 2: Sunday, 20 May 2012			
	Time		Travel to Bumthang
165	7:00 AM - 9:45 AM		Thimphu to Wangduephodrang
30	9:45 AM - 10:15 AM		Wangdue Dzong visit, Tea
185	10:15 AM - 1:00 PM		Wangdue to Chendebje
40	1:00 PM - 1:40 PM		Lunch at Chendebje
80	1:40 PM - 3:00 PM		Chendebje to Trongsa
30	3:00 PM - 3:30 PM		Trongsa Dzong visit, Tea
150	3:30 PM - 6:00 PM		Trongsa to Jakar, Bumthang

1

International Conference on Globalized Buddhism

Minutes	Time		Day 3: Monday, 21 May 2012
			Opening Session
25	8:30 AM - 8:55 AM		Registration of Participants
5	8:55 AM - 9:00 AM		Arrival of Chief Guest
20	9:00 AM - 9:20 AM		Marching
20	9:20 AM - 9:40 AM		Welcome Address by CBS
30	9:40 AM - 10:10 AM		Keynote Address by HE Minister of Home & Cultural Affairs
15	10:10 AM - 10:25 AM		Tea/Coffee Break
Minutes	Time		Session One: The Art of Buddhist Living
		Chairperson	Lopon Gembo Dorji
		Key Speakers	Prof Yoshinari Fuji (How Avidya Leads to Suffering: Paradigms and Transformations in Contemporary Japanese Society)
20	10:25 AM - 10:45 AM		Prof Shinkan Murakami (Buddhist Original Philosophy to pursue worldwide Peace)
20	10:45 AM - 11:05 AM		Dr Kathleen Gregory (Buddhism as a 'living tradition': The foundation for Buddhism without borders)
20	11:05 AM - 11:25 AM		Christina Partalaki (Nurture the Three Bodies: Buddhist guidelines for enlightened children)
20	11:25 AM - 11:45 AM		Discussions
30	11:45 AM - 12:15 PM		
75	12:15 PM - 01:30 PM		Lunch Break
Minutes	Time		Session Two: Buddhist Scholarship: Ideals, Philosophy, History and Ethnography 1
		Chairperson	Prof Kenyo Mitomo
20	1:30 PM - 1:50 PM	Key Speakers	(Prof) Asanga Guang Xing (Buddhist Impact on Chinese Language)
			Dr Tianshu Zhu (The Usnisa on Monk Images-Iconographic Study of the Cave Paintings from the Kizil and Bezeklik Regions)
20	1:50 PM - 2:10 PM		
20	2:10 PM - 2:30 PM		Prof Seiji Kumagai (Introduction of the Collection of Work of the Founder of Drugpa)

2

Programme, Abstracts and Bio-data

			Kagyu (Tirug pa bKa' rgyud) School: Tsang pa rgya ras (1161-1211)
20	2:30 PM - 2:50 PM		Dr Tsui Chunghui (The Sacred Writing by Central Asian Buddhist Monks in China (3-5 C))
30	2:50 PM - 3:20 PM		Discussions
20	3:20 PM - 3:40 PM		Tea/Coffee Break
			Session Three: <i>Buddhist Scholarship: Ideals, Philosophy, History and Ethnography 2</i>
		Chairperson	Lopon Lungten Gyatsho
		Key Speakers	
20	3:40 PM - 4:00 PM		Zhihua Yao (The Yogācāra Critiques of The Two Truths)
20	4:00 PM - 4:20 PM		Prof Albert Welter (Contested Identities in Chan/Zen Buddhism: The "Lost" Fragments of Maru Daoyi in the Zongjing lu)
20	4:20 PM - 4:40 PM		Dr Pram Suansamut (The City of Nirvana or a State of Nirvana? A problem of teaching the concept nirvana in Thai undergraduate student class)
20	4:40 PM - 5:00 PM		Discussions
90	6:30 PM - 8:00 PM		Dinner
Minutes	Time		Session Three: <i>Business, Polity, Leadership and Buddhist Values</i>
		Chairman	Asanga Guang Xing
		Key Speakers	
20	9:00 AM - 9:20 AM		Prof Georgios T. Halkias (Buddhist Models of Self: Politics when People Matter)
20	9:20 AM - 9:40 AM		Dr Hun Y Lye (The Ghostly Guises of Guanyin: Avalokitesvara and the Underworld)
20	9:40 AM - 10:00 AM		Khenpo Phuntshok Tashi (Buddhism Without Borders)
30	10:00 AM - 10:30 AM		Discussions
	10:30 AM - 10:45 AM		Tea/Coffee Break

3

International Conference on Globalized Buddhism

Minutes	Time		Day 4: Tuesday, 22 May 2012
			Session Four: <i>Buddhist Welfare</i>
		Chairperson	Prof Suchitra Chongstitvatana
		Key Speakers	
20	10:45 AM - 11:05 AM		Prof Michel Mohr (Filial Piety with a Zen Twist: Universalism and Particularism Surrounding the Sutra on the Difficulty of Repaying the Kindness of Parents)
20	11:05 AM - 11:25 AM		Dr Supin Ritpen (The Role of Buddhist Temples in Thailand in Transmitting Shan Language and Culture)
20	11:25 AM - 11:45 AM		Prof Karen C Lang (Buddhist texts on love)
20	11:45 AM - 12:05 PM		Sangay Thinley, Dendup Chopel & Dorji Gyaltsen (Tsethar: Buddhist values of nonviolence and compassion at work in Bhutan)
30	12:05 PM - 12:35 PM		Discussions
55	12:35 PM - 1:30 PM		Tea/Coffee Break
Minutes	Time		Session Five: <i>Buddhist Multiculturalism</i>
		Chairperson	Prof Albert Welter
		Key Speakers	
20	1:30 PM - 1:50 PM		Prof Siraporn Nathalang (Ethnic Identity and Buddhist Tradition: An Analysis on Ethnic Shan Festivals in Thailand)
20	1:50 PM - 2:10 PM		Bei Dawei (Conversion to Tibetan Buddhism: Some Reflections)
20	2:10 PM - 2:30 PM		Dr Françoise Pommaret (The Masters go West: A story of Buddhist adaptation to new 'conversion fields')
20	2:30 PM - 2:50 PM		Prof Norihisa Baba (Sri Lankan Impacts on East Asian Buddhism: Transmission of a Dhāraṇī Sūtra)
20	2:50 PM - 3:10 PM		Discussions
15	3:10 PM - 3:25 PM		Tea/Coffee Break
Minutes	Time		Session Six: <i>Environmentalism and New-age Buddhist Expression (Misc Themes)</i>
		Chairperson	Dorjee Tshering, Director General

4

Programme, Abstracts and Bio-data

20	3:25 PM - 3:45 PM	Key Speakers	Prof Suchitra Chongstitvatana (Buddhist Environmentalism in modern Thai Poetry)
20	3:45 PM - 4:05 PM		Riamsara (Buddhist sacred natural sites conservation: a meeting ground between international and local)
20	4:05 PM - 4:25 PM		Prof Kenyo Mitomo (Present-Day Social Problem and its Solution by Buddhism)
20	4:25 PM - 4:45 PM		Dr Arthid Sheravanichkul (Jujaka amulet in the cyber world)
15	4:45 PM - 5:00 PM		Discussions
10	5:00 PM - 5:10 PM		<i>Tea/Coffee Break</i>
Minutes	Time		Closing Session
20	5:10 PM - 5:30 PM		Closing Address by CES
15	5:30 PM - 5:45 PM		<i>Tea/Coffee Discussions</i>
90	7:00 PM - 8:30 PM		Dinner
Minutes	Time		Day 5: Wednesday, 23 May 2012
			Pilgrimage in Bunthang
180	9:00 AM - 10:00 AM		Visit to Jakar Dzong
	10:00 AM - 10:30 AM		
30			Visit to Kurje Lhakhang
	10:30 AM - 11:00 AM		
30			Visit to Jampa Lhakhang
	11:00 AM - 11:30 AM		
30			Visit to Wangduechoeling Palace
30	11:30 AM - 12:00 PM		Rest
45	12:00 PM - 12:45 PM		Lunch
195	12:45 PM - 4:00 PM		Participants can choose to visit Tang Mebartsho or Rest

5

International Conference on Globalized Buddhism

Minutes	Time		Day 6: Thursday, 24 May 2012
	9:30 AM-5:00 PM		Travel back to Thimphu
Minutes	Time		Day 7: Friday, 25 May 2012
			Pilgrimage in Thimphu
	9:00 AM - 11:30 AM		Visit to Tango Buddhist University (Optional)
	11:30 AM - 12:30 PM		Rest and Lunch at Tango Base
	12:30 PM - 1:30 PM		Visit to Tashichho Dzong
	1:30 PM - 2:30 PM		Visit to Kuensel Phodrang, Buddha statue
	2:30 PM -		Rest (Those who choose not to go to Tango can visit the rest of the places within Thimphu city and then rest)
Minutes	Time		Day 8: Saturday, 26 May 2012
	9:00 AM		Departure for Paro Airport

6

8. 筆者の発表論文: 「現代日本人の苦悩と無明」

How Avidya Leads to Suffering : Paradigms and Transformations in Contemporary Japanese Society

Yoshinari Fuji

1 Preface

One year ago, a sudden earthquake and the ensuing flood wave and nuclear crisis have violently drawn the world's attention to Japan, a Japan afflicted by economic regression, staggering production and an ever widening gap between rich and poor. The Japanese society is rapidly ageing: almost one out of three Japanese is over 65 years old and the pension system is operating at its limits, just as the public sector as a whole.

It seems that a lot of people are suffering from mental disease, or torment by mental sufferings by losing hope for the future. The main sufferings of contemporary people are distress of isolation, loneliness, anxiety, distrust, inconvenience, emptiness of life (or a sense of meaninglessness) and fear of death and so on. As a result, mental suffering like as depression is on the rise and more than thirty thousand people commit suicide every year, since more than ten years already.

We Japanese have to cure our mind and cope with these problems. We have to look for a way to live an energetic and hopeful life again.

In this paper, I will try to present the way to settle those mental problems from the Buddhistic point of view. I will eventually come to the conclusion, that a major cause of those worries is a wrong way of thinking which is based on the scientific worldview adopted in the modern times. Although we have constructed much of our civilization through the modern scientific worldview and its way of thinking, we have to pay attention to the fact that such a way of thinking in itself must be called Avidya in Buddhism.

Avidya is what we Buddhists call the root of suffering. It means no-wisdom. What we need, and what we strive to develop, is its opposite, Prajna, or Jnana in another word. It means the power to see things as they are, to cast light on the real facts. In order overcome Avidya, we have to change our way of thinking. We have to recover our ties with other people, with society, Mother Nature and the universe. Once we set out on recovering ties, we are well on our way to obtain true wisdom, Prajna, and overcome Avidya. The way to Prajna starts by recovering our relations to the world and the living beings within it. It is the way to overcome mental sufferings through true insight.

In this paper, I would like to analyze the present Japanese society from a Buddhist point of view. Japanese society, as we will see, is mostly a secular and non-religious. I would also like to look behind this fact and provide some background information.

2 Japan as a non-religious society

Researchers in the sociology of religions have recently described Japan as the most secularized and non-religious country in the world. In such a non-religious society, religion has only a limited ability to influence people's lives. A "religious" lifestyle is that which grants access to the world beyond mere appearances, to the invisible and even incomprehensible world. In contrast, a 'non-religious' lifestyle puts a narrow limitation on people's lives, limiting their outlook to the world of mere appearances. In this way, the 'non-religious' approach encourages a worldly outlook on life, it encourages secularity.

Once people put their whole awareness only in worldly appearances, it does not only limit their perception, but deeply affects their values, too. When values become secularized, limited to a materialistic approach, people lose their contact with the invisible dimension, there will be no more certainty about life after death and people start to think that life will vanish after death¹. The very idea of death is then beset with all kinds of horrors, and it becomes a taboo to even talk about death.

3 How did the Japanese society become secularized? A look at Education

3-1 Education based on scientific thought, and the mental sufferings of contemporary people

One of the factors underlying such mental suffering is in a way of cognition which Japanese people has adopt through the education system based on the scientific thought of Western modernism, after the second World War. Thus, people have been trained to understand the world through the scientific paradigm, which was established by Descartes (1596-1650).

Modern science tries to achieve pure and objective understanding, and it is widely held that such understanding can only be achieved through a strict separation between matter and mind, by isolating mind and matter from their fundamental interconnection. This principle of scientific thinking has been widely adopted. On this basis, material things are held in highest esteem, and so material achievements have absolute standard of all values.

Nonetheless, such a way of thinking has includes a mechanical view of Mother Nature, a dualism of matter and mind. It has cut the relation between humankind and Mother Nature². Therefore, the

¹ Tatsuo Haya [2011] has commented about the way of cognition in contemporary people, "Most of Japanese who has been much influenced by modern rationalism, believe only visible matters, and don't believe invisible matters, and think that invisible matters don't exist(this is scientific thought). They will not be able to believe the existence of Pure-land or salvation by Amita-Buddha."

² Yujiro Nakamura [1977] points out the problem of the mechanical view of Mother Nature, "This mechanical view of Mother Nature is skillfully made, the view of a physical solid and of Mother Nature in Descartes, brilliantly explain its mechanism. He distinguished between soul and physical solid as in different dimensions. Actuality of soul is to think, real substance of physical solid is not in weight, solidness of color but only in space. A physical solid and Mother Nature as object is completely separated from soul as subject, and was restored to space with three dimensions. In such a mechanism, both mathematical rationalism and demonstrativeness which are hardly connected, came to be connected in the mechanical view of Mother Nature.(p.p.138-139)

Japanese have come to hold scientific materialism to be the only truth³, and to be perplexed about the meaning of religion and its inherent value⁴.

To be sure, the Japanese people have accomplished an unprecedented economic development, and lead a more convenient and comfortable life with technical innovations with modern Western scientific paradigm.

Thus, the Most of people have adopted a value system in which regards but material progress and possessions alone, meanwhile they have lost slowly but surely any sensitivity for the invisible power of the religious sphere. Such a value system has occurred such mental sufferings, as distress of isolation, emptiness of life, and the fear of death and so on⁵.

Human existence is inevitably linked to searching for meaning. He has the power of thought, and so he cannot avoid yearning the meaning or aim of his life. If he cannot find it, he will suffer from the emptiness which never satisfy him. But he cannot solve this problem with science, because the object of science is confined to the material dimension. And within the material dimension alone, there is no meaning. In this way, the education based on the approach of Western modern science, does not have the power to help us on our searching for meaning and fulfillment. In this way, Japanese people have lost track of a meaningful life.

3-2 The Problem of language in education

Now, I point out the problem of language in education focused on scientific worldview. With this focus, language was reduced to a tool for material achievements. We, contemporary people have not been taught to make the connection between immediate experience and language. In school education,

³ Ryuji Ito introduces Yujiro Nakamura's opinion[1992], "Since early modern times, We, human existence had got the mechanized and analyzed way of intelligence, and objectified the phenomena and Nature, and come to know the universal rules of them, and tried to used them", and says "I think that, (The lost of Humanity through the development of civilization is), caused to the education influenced by soul-less psychology, which is based on the science influenced by thought of universality, objectivity, and restoring elements. Such psychology has usurped the awe and respect for something transcendence from Human, and has weekend sensitivity of them, and has made the noble humanity to secular one."

⁴ Tatsuo Haya[2011] says, " In our case, the influence of the view of restoration to elements, which make all the phenomena to be scattered. We hardly know it, because it is very naturally attached to us. It is fixed to the base of our point of view, worldview, a view of human beings, and a sense of values while we are not aware of it.(p.195)

⁵ In Japan, the education based on modern scientific paradigm has caused not only mental sufferings in individuals but social problems. In education, the principle of competitions, results and adaptation to environment of school have been emphasized after the second World War, now the most of people cannot find the meaning of life, and they have to endure the isolation, the meaninglessness of life and the fear of death. NHK, the broad casting station set to the air the program, "Persons in thirties cannot say 'Help me!'" at Oct 7th in 2010. This program showed that persons in thirties cannot say " Help me!", even though they are about to die of starvation.

Because they have been educated by such sense of values, as principle of results and of competitions, and the theory of self-responsibility. So most of them think that all the responsibilities for thir own problems are themselves, and they have to solve them only by themselves. Thus, In fact, the number of homeless persons in thirties have been rapidly increasing. And SPA, the internet news pointed out that the number of isolated death has increased in persons of thirties and forties, and said " Their way of thought which brings out their own isolation in society, would be a largest problem in Japanese society.", at Jan 20th in 2011.

language has been kept aloof of real experience, focusing on abstract expressions and concepts. Thus we, trust language as a semiotic system, we begin to compulsively understand all phenomena through language, and this language has no relation with our actual experience or reality.

To perceive the world through such empty abstraction does not give us the power to live. Therefore, we come to live in a world of ideas and abstract concepts. Our languages create a virtual world out of touch with reality. We have not learned how to go beyond this scientific world and connect with reality again in school.

It is thus easy to see that this trap of conceptual and abstract perception causes loss of purpose and happiness in life. It is a truly idealistic way of life, trapped in ideas and conceptions. So Most of Japanese have no choice but to shut themselves inside this unrealistic and ideal world. They cannot touch the real world, and lose their relation with their actual, immediate environment. This is called Avidya, lack of wisdom, the darkness of ignorance in Buddhism. Thus, we comprehend that Avidya, the unrelated way of approaching the world, lies at the root of the distress which a lot of Japanese experience these days.

3-3 A more effective approach to the meaning of life

The best way, thus, to resolve this kind of distresses, is to free oneself from Avidya through Wisdom, Prajna. Prajna is a sensitive way of understanding through mind and body, and of building a relation with the reality, an intimate relation with the world. When we regain the sense of relation with other people, with society, Mother Nature and the universe, we regain the ability to see ourselves in a balanced and objective way. It is in this way that we can find the answer to the meaning or purpose of our own life, to the meaning of our human existence. We can recover the original way of life.

In order to overcome such a situation, we have to transform the way of thinking which is based on the scientific worldview. At a certain stage, the scientific model obstructs us from seeing the world as it is. This paradigm separates substance from soul, it abstracts and conceptualizes them.

By going beyond the world of ideas, we can build a relation with the real world. If we thus connect language with the reality of experience, whatever we learn through the language has the power to enrich our daily lives; it gives us the power to live.

When we recover the relation between ourselves and others, we can feel the suffering of others near us. We develop empathy and we begin to find ways of helping them.

If we recover the relation between ourselves and society, we can find ways how we can contribute to society on a larger scale, tackling the various problems of society. This will naturally fill our lives with purpose and meaning. Then our anxiety and the trifling lethargy of an undirected life will be overcome. Ultimately, the purpose of our life is finding ways in which we can help others and contribute to the well-being of society as a whole. The first step to such a purposeful life is recovering our sense of relation with others, right near us, and with society as a whole. In the same way, we can recover the sense of relation with Mother Nature and the universe.

Life of man forms an integral part of Mother Nature. Our human body consists of the Mother Nature's elements, it is maintained and nourished by many forms of life that circulate in Mother Nature. Mother Nature is a part of earth, and earth is a part of the universe. If we look at our physical reality, the human body is always open to Mother Nature and the universe, and is intimately connected with them.

In the same way, I think, human minds have to be opened to Mother Nature and the universe, just like the body. The meaning of life is already given by Mother Nature, by our place in the universe. We cannot find the meaning of life by our own abstract ideas and conceptual thought .

Only humans are given the power to think freely, so they ask for comfort and the fulfilment of sensual pleasure in life. Once a desire is filled, they feel comfort, and easily mistake comfort for happiness. So they tend to use their free will to satisfy their senses.

It often happens that human beings create an artificial world where their egocentric desires are satisfied. Especially, the development of technology since the Industrial Revolution was aimed at controlling and conquering Mother Nature. This manufactured environment provides us with comfort and convenience. This has, however, deeply affected Mother Nature to the point of destruction. At the same time, we see an increasing gap between rich and poor countries, and various kinds of inequality crimes against mankind. The present economy, with its compulsive obligation to ever-accelerating growth, burdens our earth conspicuously and it cannot be sustained forever. The egocentric way of life is on its way ruin humans' life in the future and until now, humans have not been able to escape from this egocentric way of life⁶.

Such egocentricity is strengthened by the abstract, idea-based way of perceiving the world. Obviously, it does not relate properly to other people, society, Mother Nature and the universe. Without such relations, they cannot find the meaning of life. Instead of finding relations and purpose, people hope to find satisfaction in the fulfillment of their ever-increasing desires. Such a loss of contact with the real world brings Mental sufferings to the people, because of Avidya.

While most forms of life do not act against Mother Nature, only man is given 'will' which he can employ detached from Mother Nature. Why is this so?

Animals and plants are inseparable from Mother Nature, they have no ability to create a new artificial world on their own. The power to construct his environment is given only to man. Instead of wasting this precious ability for the mere fulfilment of egocentric desire, we can use it in a truly constructive way. If we convert our short-sighted and narrow-minded craving into the true

⁶ Takeshi Umehara[2012] points out that we have to innovate the civilization which pursues the egocentric desire, based on modern scientific paradigm, and he says "The accident of the Fukushima atomic power generation is the accident of civilization." "We have come to get power out of atoms according to demands of Western civilization which aims at affluent life." "Now the view of the world is on issue, Western civilization has produced the scientific and technical civilization based on the thought that the conquering Mother Nature bring happiness, but such thought is about to cause the destruction of environment and war, which collapse Human being. Now it the time that Non Western countries have to provide the advice against Western civilization .(Newspaper of Nishinihon, Feb 2nd, 2012, 'Thinking about Atomic Power Generation, My point of View)

compassion, we can find and carry out our mission to create a new world of peace and equality.

4 What is Prajna? On the mental state obtained by meditation

Prajna is the ability to look at reality as it is. Prajna, wisdom, is fundamental to Buddhism. Sakyamuni discovered the way to remedy trifling agony through true wisdom. To those who understood this opportunity, he taught the structured way to Prajna, which includes ethical behavior, meditation and understanding, such three points known as "the three kinds of training". The realization of Prajna is understanding things as they really are.

There are three kinds of wisdom: wisdom through listening, wisdom through reflection, and wisdom through cultivation. These three correspond to a stepwise approach. First, one develops some interest and listens to Sakyamuni's teaching. After this, as a second step, one contemplates the teachings heard before and scrutinizes them on one's own. The third and highest step is then to put it into practice in daily life, in its whole profundity. Only listening to the Buddha's teaching will not be enough to comprehend the deeper aspects of it. It takes some reflection, some time in quiet to really think it through conclusively. If we then find conviction based on our own scrutiny, we bring these teachings to our mind in very ordinary, daily life situations. This is the way to come to actual, deep insight. This blends into the wisdom through cultivation¹, in which we practice applying these teachings again and again. We connect to the experience of reality in our daily life.

In order to deepen our meditation, we have to direct our concentration at an object. In the teaching of early Buddhism, we concentrate our consciousness before meditation. The focus of our concentration then rests on the 'three treasures', the Buddha, the Dharma and the Sangha. In this state of concentration, we can overcome our conceptual thinking, our habitual construction of ideas, and come to rest in a state of meditation. Once conceptual thinking comes to a rest, we gain a connection with the real world, with both body and mind. In this way we can perceive our relation with the people around us, with society, Mother Nature and the universe as a whole. We come to know the relations between individuals and the whole, and realize that all individuals are united in one body. We come to realize that all existence is based on altruistic compassion without self-centeredness. And we come to know that only man lives a self-centered life filled with a desire. We come to feel out of place with such a way of life. We come to perceive that our egoism is wrong, comparing the universe which has no

egoism but has compassion. Such an understanding is Prajna, or wisdom. Correcting errors, we will come to be what we ought to be. We can get a real feeling of the world in which we are connected to each other through meditation through not head but body and mind.

Prajna is the true understanding of what we are, both subjectively and relatively. Once we begin to feel the world which connect us all, we understand just how much we have been living an egocentric lifestyle. We make our self-centered mind itself the object of our meditation, thus rectify our self-centered way of life, and recover our true Mother Nature of compassion. Ultimately, Prajna is a

sensitive understanding through one's own experience rather than just intellectual and rational cognition.

The Buddha Sakyamuni taught that the way to Prajna is the way of meditation. Meditation is mindfulness, the concentration of our consciousness. The tradition of Mahayana Buddhism transmits various ways of meditation, such as shamatha and vipashyana, repeating of the name of Buddha Amitabha, chanting the Nichiren prayer, Zen meditation while sitting or even while walking, to name just a few. All these practices have the same fundamental function, they are methods of meditation⁷. They assist us concentrating our consciousness so that we can recover the feeling of relation between ourselves and others, society, Mother Nature, and the universe. Rather than perceiving the world through abstract language and ideas, we can touch it directly with body and mind without language.

To sum up, we can say that there are two fundamental ways of relating to the world:

- 1) Avidya ; the perception through abstract language and concepts, through self-centered desires and a look superficial appearances
- 2) Prajna ; the direct recognition based on experience, a relating to the world in an unbiased and direct way, through our body and senses.

In order to follow the teaching of Buddha, it is not sufficient to just listen to the Buddha's teaching, and grasp it as an abstract concept. That is not the way out of the world of ideas, but rather another virtual world of imagination. We have live these teachings in order to connect to our experiences in daily life.

To that end, we have to practice the three kinds of training and the three kinds of Jnana. We have to first listen to the teaching in concentration, then repeat those teaching and take them to heart, and finally master deep aspects of the teaching in life.

5 Conclusion - In order to overcome the Avidya in contemporary Society-

Being ignorant has become a kind of fashion. Of course, it is convenient to rely on the school's textbooks as long as that fulfils one's material needs. But from a Buddhist perspective, this is nothing but Avidya. It does not help recognizing things in the manner they actually are, but we grasp them as abstract ideas. There is no true Prajna in it. Our education is limited to a certain set of ideas, but students are left on their own all the distress that comes from such a way of perceiving the world. If

⁷ Hideho Arita [2011], neulologist of brain says “ Meditation in sitting revitalizes the serotonin nerves. Increasing to secrete serotonin in a brain, changes are appeared in the action of cerebrum while awakening and positive feelings are appeared in emotion. Furthermore, in such circumstances, blood flow in frontal brain increases and has good influence on such actions of brain like concentration, intuition, empathy, and self-consciousness.” And he corroborated that humans can get the same effects through walking practices with enchanting mantra in mountaineering asceticism, and pointed out that they will get the same effect through chating the holy invocation in Jodo-sect and Jodo-Shin-sect of Japan”.

we just look at the very facts, at the very state most people are in, we can see that science as such has not helped us to overcome worry and distress. For that, an altogether different approach to our existence and our experience is necessary. It would require transforming the analytical and conceptual way of seeing the world into a cognition by body and mind, touching the real world.

Such transformation is possible through the various ways of meditating and focusing one's mind as I described earlier, invocation, walking meditation and so on. In Japan, various Buddhist denominations, such as the Pure-Land tradition, Zen, or Nichiren have transmitted these practices for a long time, the teachings have gradually weakened, the essence of the practices has become evasive and a lot of priests have turned to a secular life.

We Buddhists need to call out to the Japanese people to change their approach and overcome the spiritual crisis of the present society. We, the people of today, have to recover our relation with the reality. We have to recover it through obtaining Prajna by the practice of Buddhistic meditation. Then, we will be able to see the real world for the first time.

Reference:

<Books>

J.P. Miller [1994] "Holistic Education", Japanese Translation, Tokyo, Syunjyu-sya.

Tatsuo Haya [2011] "Message of Gotama Buddha", Tokyo, Daizo-syuppan.

Yujiro Nakamura [1977] "Philosophy at the Present Time", Tokyo, Iwanami-syoten.

[1992] "What is the Critical Intelligence?", Tokyo, Iwanami-syoten.

<Papers>

Hideho Arita [2011] 'Buddhism and the Science on Nerve of Brain', "What is Shinran?"
Tokyo, Kodansya Mook, pp.91-93.

Ryuji Ito [1995] 'A Study of Holistic Paradigm-In Order to Rear the New Young People-', "Ryuji Ito Books of EducationI; Thinking about Human and Education", Tokyo, Fukumura-syuppan.

[1999] 'Trans-personal Education and the Enlightenment of Spirituality- To become a man Who Live a Life of Truth-', "Bulletin of Graduate School in Toyo University".

9. ブータン訪問写真集



バンコクにてブータン航空の飛行機に搭乗



パロ空港の建物



ティンブー市内の交差点、信号機がない。



ティンブー市内の土産物屋にて



ティンブー市内の土産物屋にて



チャンガンカ・ラカンの入口（ティンブー）



チャンガンカ・ラカンの外壁にはマニ車が巡らせてある。



チャンガンカ・ラカンの側にあるチョルテン



マニ車の奥の彫刻



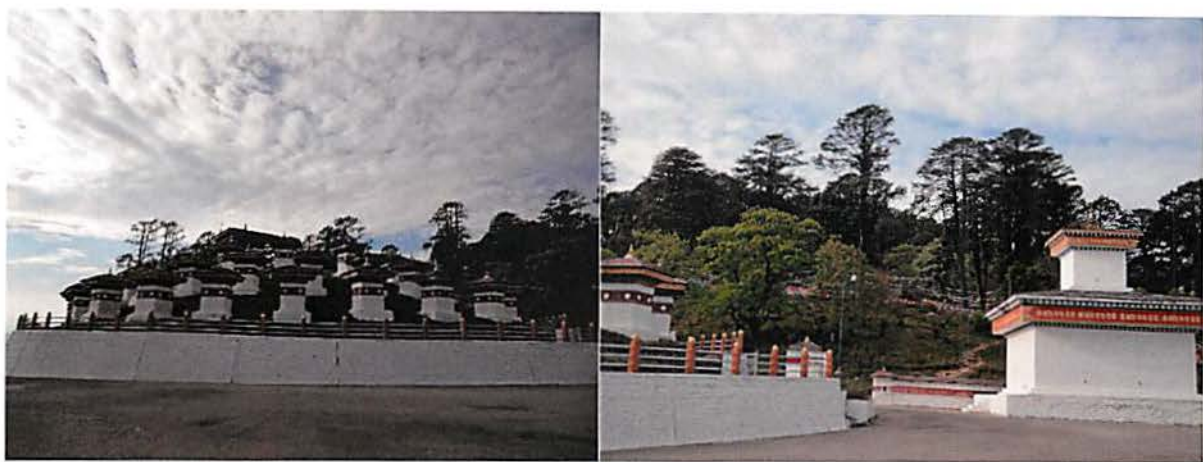
チャンガンカ・ラカンのマニ車



内務・文化大臣主催の晩餐会、女性達による踊りと歌が披露された。



街角にたつダルシン（経文の旗）



ドゥリユク・ワンゲル・カンツァン・チオルテン（１０８のチオルテンがある）



修復中のワンドゥ・ポタン・ゾン、私たちの訪問後、火災で全焼した。



ワンドゥ・ポタン・ゾンの壁画

ワンドゥ・ポタン・ゾンの
お寺の住職さん



峠に掛けられたルンタ（経文の旗）



昼食をとったレストランの犬、
ブータンの犬達はどこでも昼寝している
犬達にとっても幸福な国である。



食堂にあった写真「前王と四名の妻達の写真」



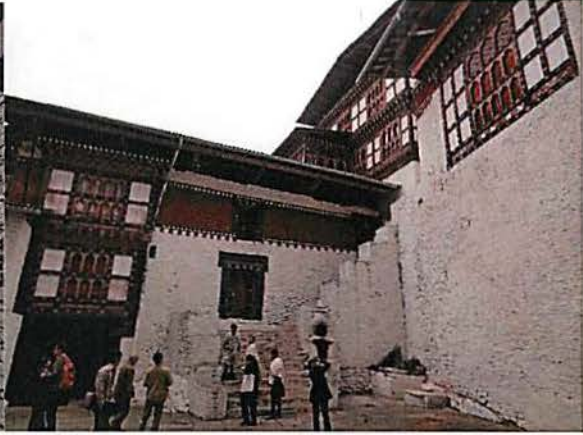
バイキング形式の昼食



食堂のレストランで売っていた土産物



トンス・ゾン



トンス・ゾン



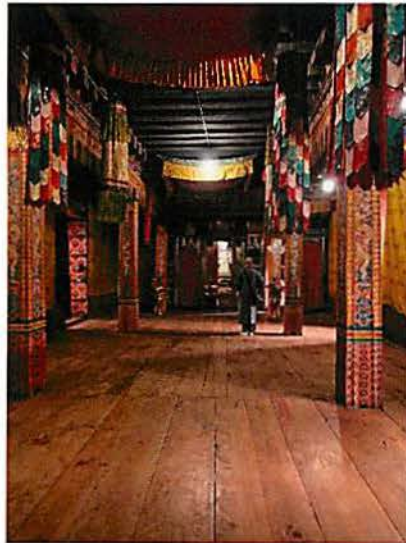
トンス・ゾン



トンス・ゾンの内部



トンス・ゾン遠景



トンス・ゾン内の寺院の本堂



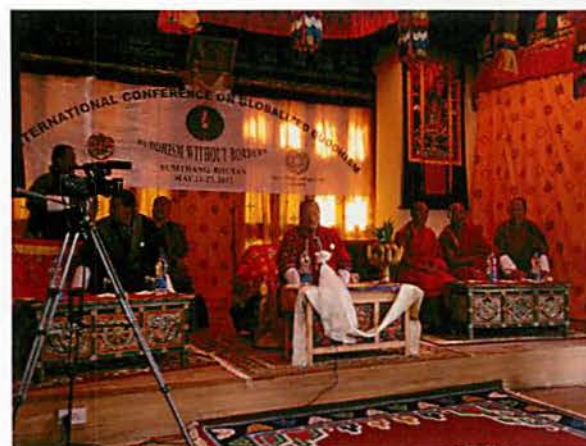
トンス・ゾン内の寺院の本堂



国際会議会場の入り口



ブムタンで滞在したホテル



会議の開会式、中央は内務・文化大臣



筆者の発表



会議の会場



会議の風景



内務文化大臣と参加者



街中にあるマニ車堂



少年僧侶達



滞在したホテルでの会食



クルジェ・ラカン



クルジェ・ラカン



クルジェ・ラカンの本堂入口



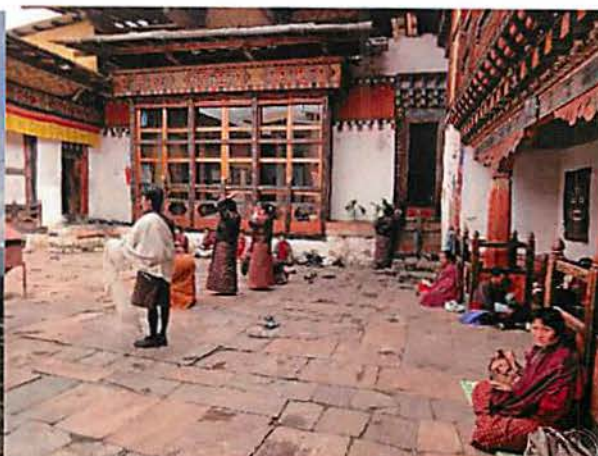
クルジェ・ラカンに来ていた家族



ブータン研究所の所員さん達



ジャンパ・ラカン



ジャンパ・ラカンで礼拝する人々



ジャンパ・ラカンで礼拝する人々



ジャンパ・ラカンの周囲を歩いてお参りする人々



ジャンパ・ラカンの周囲を歩いてお参りする人々



ジャンパ・ラカンでの読経



ジャンパ・ラカン内部のマニ車



ジャンパ・ラカン本堂の周囲でお参りする人々



ジャンパ・ラカン内部で礼拝する人々



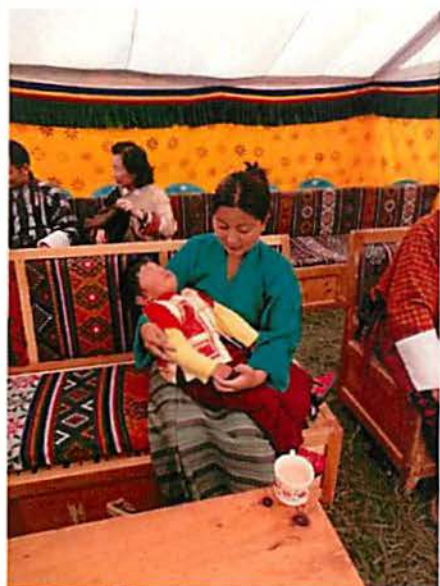
ジャンパ・ラカンの周囲でお参りする人々



ジャンパ・ラカンの周囲でお参りする人々



少年僧侶達



お参りに来た家族



お参りに来た家族



本堂入口の壁画



本堂入口の壁画



ジャンパ・ラカンでリンポチェを待つ
人々



リンポチェの祝福を受ける人々(ジャンパ・ラカン)



ジャカルル・ゾン（戦闘が出来る城である。）



一般的な家庭の仏間 右側は僧侶のための席

家庭の經典棚



一般的な家庭の仏壇、決して豪華な方ではないという



ジャンパ・ラカンの僧侶



キチュ・ラカン



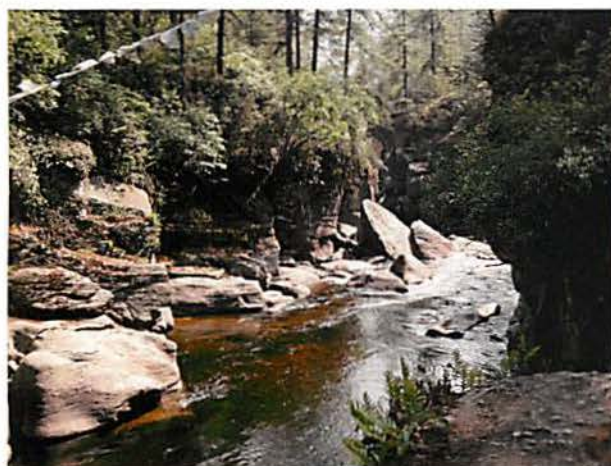
キチュ・ラカンの手回しマニ車堂と堂守



のどかな自然の風景



牛は離し飼いにされている



タン・メバルチョ



タン・メバルチョ



とある寺院



ジャンパ・ラカン入口のマニ車



土産物屋の子ども達



小学生



タンゴ仏教大学



タンゴ仏教大学



タンゴ仏教大学入口



幼きリンポチェの写真



現在のリンポチェ



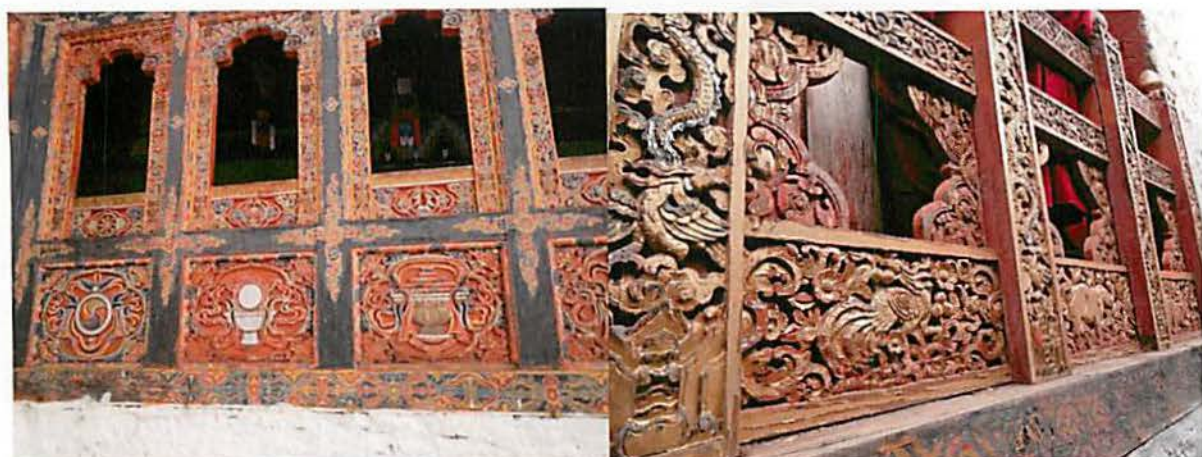
リンポチェの祝福を受ける



本堂の内部



本堂の内部



タンゴ仏教大学の壁や窓の装飾は緻密で大変美しい



タンゴ仏教大学



大学内部



大学の建物



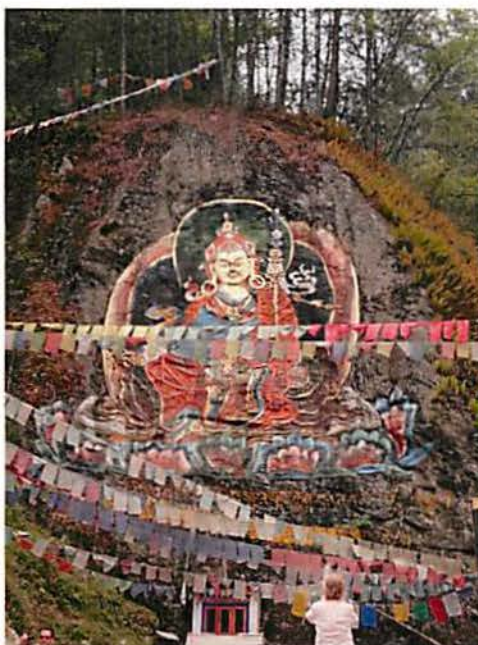
僧侶達



大学入口の壁画（右に 90° 回転）



大学入口の壁画（右に 90° 回転）



登山道にある石壁画



資材は馬が運ぶ



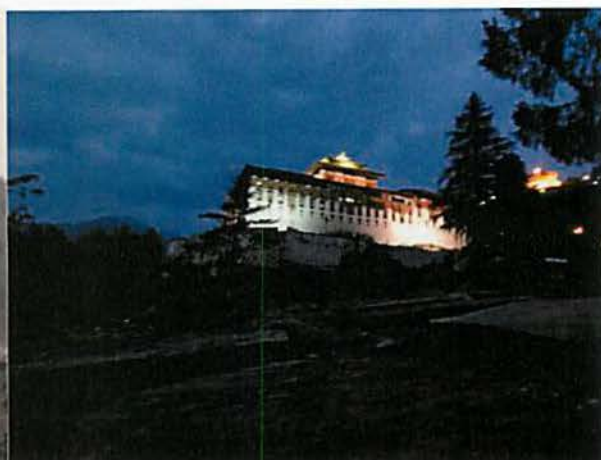
水車式のマニ車堂



堂内でマニ車が回っている



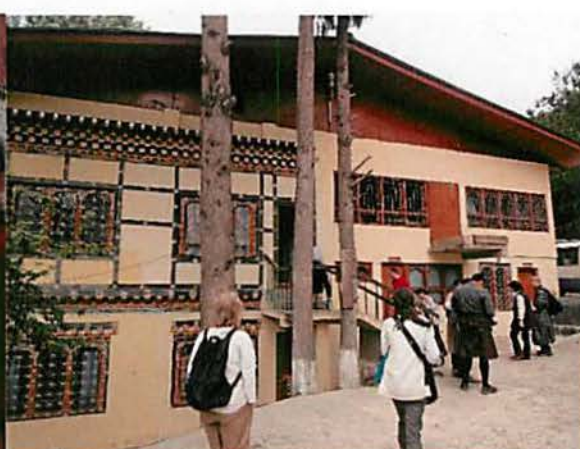
パロ・ゾン



パロ・ゾン



パロ・ゾンの僧侶達



ブータン研究所を訪問



ブータン政府の建物



街角でゲームする若者



ゴーを買った店の店員さんと



ホテル職員の案内で買い物



お別れの晩餐会で、様々な踊りが披露された



お別れの晩餐会で、様々な踊りが披露された

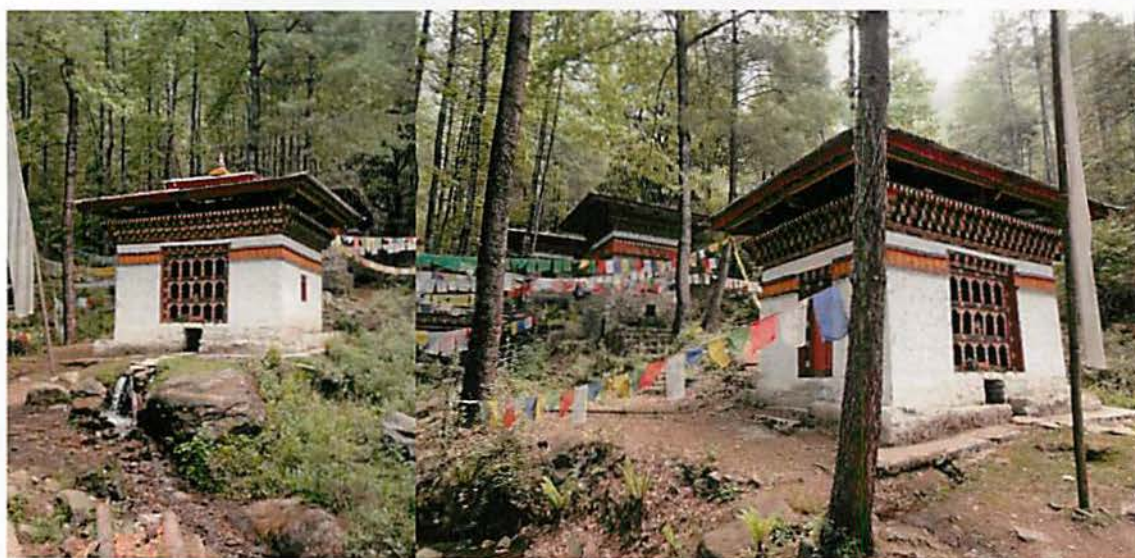




お別れの晩餐会



中学生くらいに見える



タクツァン僧院の登山口の三連水車式のマニ車堂、小川に沿って三棟が並ぶ



崖の上にあるタクツァン僧院



登山道にあるマニ車



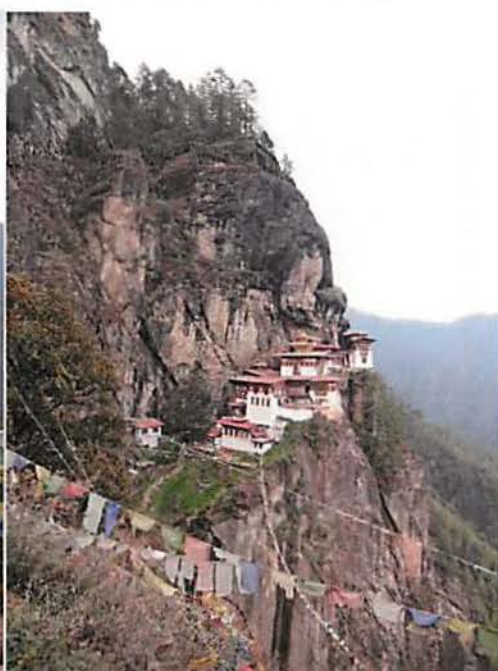
マニ車とタクツァン僧院



登山道近くにサルがいた



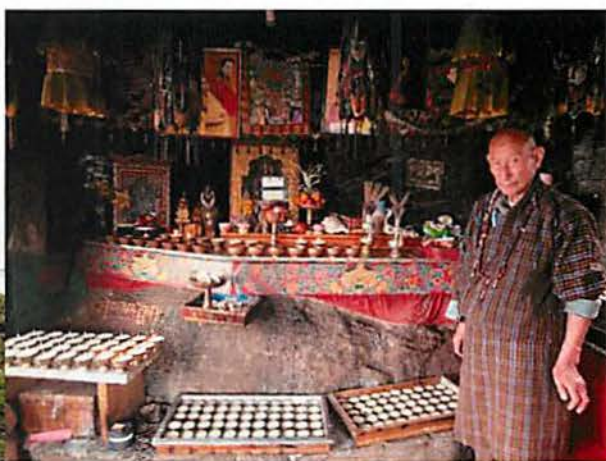
案内をしてくれた青年と筆者（左）



タクツァン僧院



タクツァン僧院



タクツァン僧院をのぞむ崖の上の小さなお堂



ランプが灯されている



お堂に掲げられた絵（右に 90° 回転）



筆者がつけたランプ



お堂の中のランプ



石積みがあった



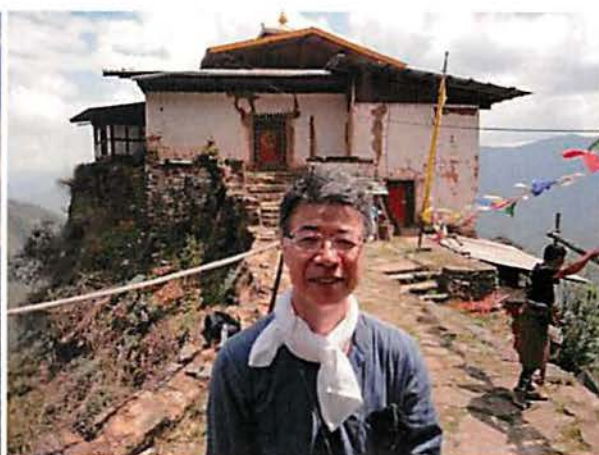
登山道のお堂



タクツァン僧院に続く谷間にお経の旗が掛かっている



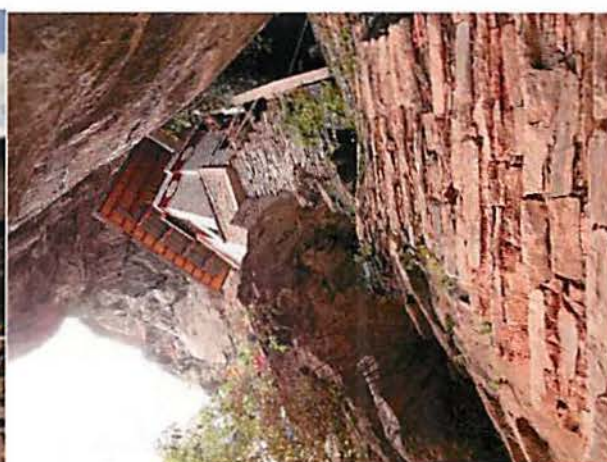
タクツァン僧院を見下ろす崖の上の天空の寺院



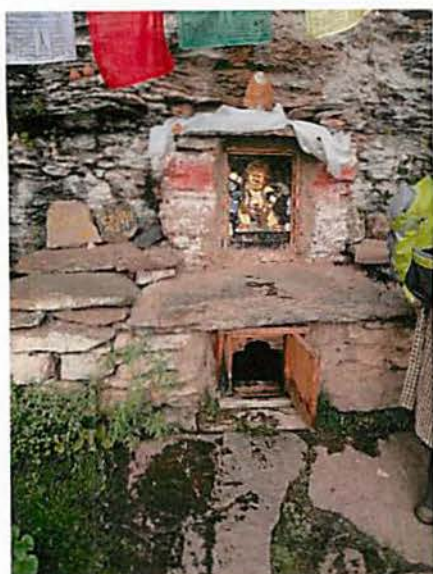
筆者



タクツァン僧院が下に見える



タクツァン僧院の側のお堂（右に 90° 回転）



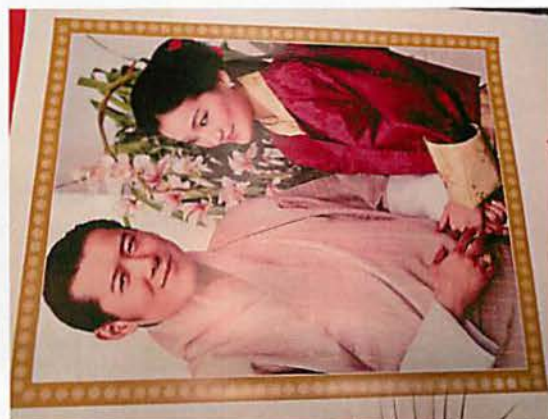
水汲み場の上の仏様



村落の風景、家はどれも大きく立派である



大きく立派な住宅（パロにて）



国王夫妻の写真（右に 90° 回転）



パロのホテルの従業員（右に 90° 回転）



帰国の途、バンコクで夕食



バンコク・スワナブーム空港にて



スワナブーム空港にて



日本への帰途、夜行便に搭乗



関西空港に到着